

現代語における二重ヲ格について

中 村 暁 子

1. はじめに

- (1) a. 子供達を教える。
b. 音楽を教える。
c. *子供達を音楽を教える。(益岡隆志 (1987b))

「子供達を」「音楽を」は個別には動詞「教える」に呼応するが、それらを同時に用いることはできない。このように現代日本語では、一つの動詞に二つのヲ格が呼応することはできない。つまり、二重ヲ格は非文法的である^(注1)。(1 c) のほかにも非文法的な二重ヲ格には次のような例がある。

- (2) *ペンキを壁を塗る。(益岡隆志 (1987b))
(3) *花子を顔を殴る。(益岡隆志 (1987b))
(4) *飛行機を東京上空を飛ばす。(益岡隆志 (1987b))
(5) *太郎を家を追い出す。(新屋映子 (1995))

二重ヲ格が非文法的であることは、使役文でも同様である。

- (6) *太郎は花子を本を読ませた。(柴谷方良 (1978))
(7) *太郎は花子をこの道を通らせた。(柴谷方良 (1978))
(8) *虎を檻を出させる。(寺村秀夫 (1982))

ところが、次のような文では二重ヲ格が許容される。

- (9) 吹雪の中を遭難者を捜索した。(杉本武 (1986))
(10) 雨の中をグランドを3周走った。(益岡隆志 (1987b))
(11) 嵐の中を家を出た。(新屋映子 (1995))
(12) 子供を暗闇の中を走らせた。(益岡隆志 (1987b))

しかし、(9)～(12)の文も普通は一方のヲを省いた表現が用いられる。

- (9') 吹雪の中遭難者を捜索した。

とはいっても、(9)～(12)の二重ヲ格が避けられることと(1c)～(8)の二重ヲ格が非文法的であることとの間にはかなり隔たりがありそうである。それではなぜ、同じ二

重ヲ格の間で非文法的か否かという違いが見られるのであろうか。両者の違いはいったい何なのであろうか。本稿では、非文法的な二重ヲ格と許容される二重ヲ格を含め、現代語における二重ヲ格の全体像を明らかにしたい。

2. 先行研究

先の(1c)～(8)のように非文法的な二重ヲ格にはさまざまな種類があるが、それらのうちのいずれかについて言及したものに柴谷方良(1978)、寺村秀夫(1982)、杉本武(1986)がある。

柴谷方良(1978)は、複合動詞構文、使役構文を観察することで得られた(13c)と(14b)が非文法的であるという事実に基づいて、「二重対格目的語制約」を導いている。

- (13) a. 太郎は勉強をした。
- b. 太郎は英語を勉強した。
- c. *太郎は英語を勉強をした。
- (14) a. 太郎は花子に本を読ませた。
- b. *太郎は花子の本を読ませた。

しかし、「二重対格目的語制約」では、先に挙げた(4)(5)(7)(8)の二重ヲ格がなぜ非文法的なのか説明できない。また(13c)において、対格目的語「勉強を」は動詞「する」に呼応しているが「英語を」は「する」に呼応していない。つまり、「英語を」は「勉強をする」の目的語であって、「する」の目的語ではない。にもかかわらず、「英語を」を「する」の目的語とみなし、(13c)が非文法的であることを「二重対格目的語制約」によって説明しているのは訂正の必要がある。

寺村秀夫(1982)は、動詞「出す、おろす、はなす」類が用いられる二重ヲ格、使役文の二重ヲ格を取り上げ、「助詞の再調整」について指摘している。つまり、「一つのコトの表現を組み立てる際には、できるだけ同じ助詞を使わないという配慮が原則として働いて」おり、「たまたま重複したときは、一方を何か代りの形に変えるのであるが、そのときは、必須補語のために割り当てられた助詞の方が優先し、副次補語のほうは、代りの形に替えるという一般則がある」というのである。

しかし、(1c)～(3)、(5)～(8)では二つのヲ格がともに必須補語であり^(註2)、「助詞の再調整」が行われる際、必然的に必須補語が代替の形に置き換えられることになる。「助詞の再調整」で、必須補語であるかどうかという点が関係しているのか、再考の余地がある。

杉本武(1986)は、移動動詞の二重ヲ格と使役文の二重ヲ格について触れている。(4)(5)のような移動動詞の二重ヲ格、(7)(8)のような移動動詞の使役化による二重ヲ格の場合

は「を」格名詞句が連続することが表層的に嫌われている」のに対して、(6)に見られる他動詞の使役化による二重ヲ格の場合は「他に目的語が存在するので、被使役主が「を」でマークされて、目的語になることが排除されている」と説明している。つまり(4)(5)(7)(8)と(6)の非文法性は、それぞれ「を」格名詞句連続制約」「二重目的語制約」によって説明され、「二つの場合に働いている制約は、全く別のもの」であると指摘している。

しかし、そうすると(1c)～(3)の二重ヲ格については、どのように説明するのであろうか。(1c)～(3)は移動動詞や使役化による二重ヲ格ではなく、目的語が二つ存在する二重ヲ格である。単に表層的な問題であるのか、それとも二つの目的語が現れるのが排除されているのか、どちらに解釈するのか定かではない。したがって、(1c)～(3)の二重ヲ格を含め、あらゆる非文法的な二重ヲ格を包括する説明が望まれる。

以上の先行研究に対して、益岡隆志(1987b)、新屋映子(1995)は(1c)～(8)のような全ての種類の非文法的な二重ヲ格について言及している。

益岡隆志(1987b)は、二重ヲ格が非文法的か否かは二つのヲ格が「同じ意味を表す」か否かが基準となると指摘している。(9)は片方のヲ格が「状況を表すヲ格」で、「(動作)対象を表すヲ格」とは意味が異なるので、二重ヲ格が許容されるというのである。

しかし、非文法的な二重ヲ格である(1c)は対象と相手、(4)は対象と経由点、(5)は対象と起点、(6)は被使役主と対象、(7)は被使役主と経由点、(8)は被使役主と起点、を二つのヲ格が表しており、意味が異なる。したがって、意味が同じであることが二重ヲ格が非文法的だと見なされる基準とは言えない。二重ヲ格が非文法的であるか否かの新たな基準を提出する必要がある。さらに、柴谷方良(1978)と同じく「漢語動詞+ヲスル」の二重ヲ格((13c))を取り上げているが、これについては先にも述べたように、二つのヲ格が同一動詞に呼応していない点で、そのほかの二重ヲ格とは区別しなければならない。

新屋映子(1995)は、(1c)～(3)については「一つの述語が意味役割を同じくする名詞句を複数取ることはない」という「一文一格」の原理で説明している。(4)(5)については、二つのヲ格の組み合わせが「必須格」どうしなので非文法的であると指摘している。(6)については、「一文一格」の原理が適用されるのではなく、一つの述語が二つの「対象格」を取り、その二つの「対象格」が同じヲ格を取っているために非文法的であると論じている。

しかし、(1c)～(3)のうち(1c)は「子供達を」「音楽を」がともに「対象格」ではなく、前者が相手を表すヲ格、後者が対象を表すヲ格である。両者の意味役割が異なるにもかかわらず、共起できないのはなぜかということを考えなければならない。と同時に、ヲ格の意味役割について詳細な記述が必要である。そして何よりも、(1c)～(8)が非文法的である理由を包括的に説明できないか考える余地がある。

(9)～(12)の許容される二重ヲ格について言及したものには、柴谷方良(1978)、杉本武(1986)、益岡隆志(1987b)、新屋映子(1995)がある。

柴谷方良(1978)は、一方のヲ格、例えば(9)の「吹雪の中を」が「目的語としてではなく、副詞的な働きをしている」ために二重ヲ格が許容されると指摘している。杉本武(1986)は、一方のヲ格を「状況補語」と呼び、「目的語と状況補語、移動補語と状況補語は、機能的に違いで、反発力が弱」く共起しうると指摘している。益岡隆志(1987b)の指摘については、先の通りである。新屋映子(1995)は、一方のヲ格を「場所格」と呼び、二つのヲ格のうち「一方または両方が随意格である」ために二重ヲ格が適格となると述べている。

以上の指摘から、二重ヲ格が許容されるのには、一方のヲ格がヒントになりそうである。そのほかのヲ格とどのように異なるのか明らかにするとともに、二重ヲ格が許容される条件を提示したい。

3. 非文法的な二重ヲ格

3. 1 対格一対格

本稿では、次のような動作・作用の対象を表すヲ格を対格と呼ぶ。

(15) 太郎は花子をなぐった。

ヲ格の表す対象は、意味役割の観点からさらに細分化される。すなわち、対格には下位類が存在する。具体的には次のようである。

意味役割	例
働きかけの対象	体を <u>押</u> さえつける
働きかけを受け変化する対象	豆を <u>煮</u> る、壁を <u>塗</u> る、麦を <u>挽</u> く
主体の知覚・認識・感情の対象	復讐を <u>恐</u> れる
手段としての対象	臼を <u>挽</u> く、鞭を <u>打</u> つ
行為の結果としての対象	粉を <u>挽</u> く、湯を <u>沸</u> かす
材料としての対象	麦を <u>挽</u> く
相手としての対象	生徒を <u>促</u> す
変化を与える対象	ペンを <u>塗</u> る

表にしたがって次の例の意味役割を考えてみる。

(16) ・子供達を音楽を教える。(益岡隆志(1987b))((1c)再掲)

(17) ・ペンを塗る。(益岡隆志(1987b))((2)再掲)

(18) ・花子を顔を殴る。(益岡隆志(1987b))((3)再掲)

(16)は、「子供達」が相手としての対象、「音楽」が働きかけの対象である。(17)は、「ペンキ」が変化を与える対象、「壁」が働きかけを受け変化する対象である。(18)は、「花子」「顔」がともに働きかけの対象である。そして、「顔」が「花子」の一部分となっており、両者には「全体一部分」の関係が成立している。(16)～(18)から、異なる意味役割であっても同じ意味役割であっても、二つの対格の組み合わせによる二重ヲ格は非文法的であることが分かる。このほか、対格一対格の組み合わせとして次のような例が挙げられる。

- (19)・お米をごはんを炊く。
- (20)・彼を決心を促す。
- (21)・アパートを六畳一間を借りる。
- (22)・臼を麦を粉を挽く。

このように、どんな意味役割でも単独なら対格で表すことができるが、二つの対格を同時に用いることはできない。よって、二つの対格の意味役割が同じか異なるかということと、対格どうしの組み合わせの二重ヲ格が非文法的であることとは関係がないと言える。

3. 2 対格一移動格

次のような移動に関わる場所を表すヲ格を移動格(奥津敬一郎(1967))と呼ぶ。

- (23) 太郎は歩道を歩いた。

移動格には、意味役割の観点から経由点と起点を表すものがある。(24)は経由点、(25)は起点を表している。

- (24) 川を渡る。
- (25) 家を出る。

では、一方が対格、もう一方が移動格の組み合わせの二重ヲ格を見てみよう。

- (26)・飛行機を東京上空を飛ばす。(益岡隆志(1987b))((4)再掲)
- (27)・太郎を家を追い出す。(新屋映子(1995))((5)再掲)

(26)では「飛行機を飛ばす」「東京上空を飛ばす」のように、対格と経由点を表す移動格を個別に用いることはできるが、これらを同時に用いると非文法的であることが示されている。(27)は、対格と起点を表す移動格が同時に用いられた例である。対格と移動格を同時に用いたために非文法的となっている。このように、移動格の意味役割が経由点、起点のいずれであっても、対格と移動格の組み合わせによる二重ヲ格は非文法的であることが分かる。

3. 3 被使役主一対格

本稿では、使役文における被使役主を表すヲ格を、対格と区別して扱うことにする。なぜなら、動詞が使役態をとることで現れる被使役主は動作・作用の主体であり、動作・作用の対象を表す対格とは、性格が異なるからである。

では、一方が使役文における被使役主を表し、もう一方が対格を表す二重ヲ格の例を見てみよう。

(28) *太郎は花子を本を読ませた。(柴谷方良(1978))((6)再掲)

これは、「花子」が被使役主を表し、「本」が対象を表している。この例から、もともと対象を表すヲ格をとる動詞が使役化される場合に被使役主がヲ格で表された二重ヲ格は、非文法的であることが分かる。

3. 4 被使役主一移動格

最後に、一方が使役文の被使役主を表し、もう一方が移動格を表す二重ヲ格を見る。

(29) *太郎は花子をこの道を通らせた。(柴谷方良(1978))((7)再掲)

(30) *虎を檻を出させる。(寺村秀夫(1982))((8)再掲)

(29)は「花子」が被使役主、「この道」が移動の経由点を表している。(30)は二つのヲ格が被使役主と移動の起点を表している。いずれも二つのヲ格の組み合わせが被使役主を表すヲ格と移動格である。このように、もともと移動格のヲがある場合には、被使役主をヲ格で表すことができないということが分かる。

3. 3. 3. 4から、使役文においてほかにヲ格がある場合には、被使役主をヲ格で表せないことが明らかになる。

以上、二重ヲ格が非文法的となるパターンを見てきたが⁽¹¹⁸⁾、全てのパターンに共通するのは、二つのヲ格によって示される補語が必須補語であるということである。対格－対格の組み合わせでは、二つの対格の意味役割が異なっても同じであっても、二つの対象は動詞にとって必須である。対格－移動格の組み合わせでは、移動を表す動詞にとって対象となる人と移動に関わる場所は必要不可欠である。被使役主－対格、被使役主－移動格の組み合わせでは、使役文ならば被使役主は当然必要であるし、他動詞であれば対象が、移動動詞であれば移動に関わる場所が必要である。このように、動詞にとって必要な補語を同じヲ格で表そうとして非文法的となっていることが分かる。非文法的な二重ヲ格だと判断する基準は、二つの必須補語を二つのヲ格で表しているということである。

4. 許容される二重ヲ格

これまで見てきた二重ヲ格とは逆に次の二重ヲ格は許容される。

(31) 吹雪の中を遭難者を検索した。(杉本武(1986))((9)再掲)

(32) 雨の中をグランドを3周走った。(益岡隆志(1987b))((10)再掲)

(33) 嵐の中を家を出た。(新屋映子(1995))((11)再掲)

(34) 子供を暗闇の中を走らせた。(益岡隆志(1987b))((12)再掲)

非文法的な二重ヲ格と異なる点は、(31)の「吹雪の中を」、(32)の「雨の中を」、(33)の「嵐の中を」、(34)の「暗闇の中を」が対格や移動格や被使役主を表すヲ格ではないという点である。これらのヲ格名詞句は動作の行われる状況を表している。本稿ではこれらを状況格(杉本武(1986))と呼ぶ^(注4)。

では、なぜ一方のヲ格が状況格ならば二重ヲ格が許容されるのだろうか。その理由として、対格や移動格や被使役主を表すヲ格が必須補語であるのに対して、状況格が副次補語であることが関係していると思われる。副次補語は必須補語とは違って動詞との結びつきが弱い。そのため、必須補語とともに用いても衝突しないのだと考えられる。つまり、状況格は必須補語と動詞とが結び付いた全体の状況を説明するという形になっているのである^(注5)。

このように、二重ヲ格が許容されるのは必須補語と副次補語の組み合わせの場合であることが分かる。すなわち、一方のヲ格が副次補語であれば必須補語とは衝突せず二重ヲ格が許容されるのである。

ところで、状況格以外に副次補語のヲ格はないのであろうか。次の例を見てみよう。

(35) a. ?空腹のまま七時間を山道をさまよった。

(35a) には、動作の行われる時間を表すヲ格が見られる。本稿では、このヲ格を仮に時間格と呼ぶことにする。時間格も状況格と同じく、動詞との結びつきが弱い副次補語である。

しかし、一方のヲ格が状況格である二重ヲ格とは異なり、(35a)の文法性は微妙で、個人差も生じるところであろう。その原因は、時間格と時間を表さない動詞との呼応が微妙であることにあると思われる。

(35) b. ?空腹のまま七時間をさまよった。

普通、時間格は時間を表す動詞に呼応する^(注6)。

(35) c. 空腹のまま七時間を過ごす。

時間格が時間を表す動詞に呼応することは、(35a)に時間を表す動詞が結合した複合動詞を用いると許容度が上がることから根拠づけられる。

(35) d. 空腹のまま七時間を山道をさまよい続けた。

これまで、一方のヲ格が時間格である二重ヲ格について触れた先行研究はなかったが、(35a)の二重ヲ格の例も全く不適格とは言えないので、一応許容される二重ヲ格の可能性として挙げておく。

以上、許容される二重ヲ格について見てきたが、一方のヲ格が状況格や時間格といった副次補語であることが二重ヲ格が許容される条件であると言える。

5. まとめ

本稿での考察をまとめると、次のようになる。

	条件	ヲ格の組み合わせ
非文法的な二重ヲ格	必須補語どうし	対格 - 対格 - 移動格 被使役主 - 対格 - 移動格
許容される二重ヲ格	副次補語+必須補語	状況格 - 対格 - 移動格 - 被使役主 (時間格 - 対格 - 移動格 - 被使役主)

ところで、以上のような二重ヲ格のほかに、先行研究(柴谷方良(1978)、益岡隆志(1987b))で触れられていた「漢語名詞+ヲスル」型の二重ヲ格がある。

(36) *太郎は英語を勉強をした。(13c) 再掲

これまで見てきた二重ヲ格は二つのヲ格がともに同一動詞に呼応していたが、(36)は一方のヲ格、すなわち「勉強を」のみが動詞「する」に呼応している。そして、「英語を」は「勉強をする」に呼応している。

(37) *太郎は英語を 勉強をした。

したがって、本稿で扱った二重ヲ格とは構造が異なるのである。当然、非文法的となる理由も異なる。(36)が非文法的なのは、ヲ格が連続することが表層的に排除されているからであると考えられる。よって本稿では、(36)を表層的に非文法的とされた二重ヲ格として位置付けたい^(注7)。

最後に、寺村秀夫(1982)が指摘していた「助詞の再調整」についてであるが、ヲ格が重複した場合は、必須補語であるか副次補語であるかに関わらず、代替の形式が存在する方がその形式に替えられるのではないだろうか。例えば、次のようである。

(38) *子供達を音楽を教える。(益岡隆志(1987b)) ((1c) 再掲)

子供達に音楽を教える。

- (39) ・太郎を家を追出す。(新屋映子 (1995)) ((5) 再掲)

太郎を家から追出す。

- (40) ・太郎は花子を本を読ませた。(柴谷方良 (1978)) ((6) 再掲)

太郎は花子に本を読ませた。

このように、一方のヲを意味役割を変えることのない他の助詞に置き換えることで「助詞の再調整」が行われる。ただし(41)では、二つの対象となる名詞の間に包含関係を見出した、意味的な面からの再調整が行われている。

- (41) ・花子を顔を殴る。(益岡隆志 (1987b)) ((3) 再掲)

花子の顔を殴る。

また許容される二重ヲ格においても、非文法的な二重ヲ格の場合と同様に再調整が行われる。

- (42) 吹雪の中を遭難者を搜索した。(杉本武 (1986)) ((9) 再掲)

吹雪の中遭難者を搜索した。((9') 再掲)

- (43) ?空腹のまま七時間山道をさまよった。(35a) 再掲)

空腹のまま七時間山道をさまよった。

このように、代替の形式が存在する方をその形式に替えることで再調整を行い、二重ヲ格が避けられるのである。

注

- 1 「サーチライトはうごいてる、右を左を、さがしてる。」(北原白秋(1942)「サーチライト」『港の旗』アルス(北原白秋(1987)『白秋全集27』岩波書店、所収))のような同格並列によるヲ格の重複は含まれない。
- 2 寺村秀夫(1982)は、動詞「飛ぶ」がとる「通りみち」を表す補語を準必須補語と見なしている。
- 3 3.1~3.4では取り上げなかったが、移動格-移動格の組み合わせもまた非文法的である。

- (44) ・その洞穴を脇道を歩いた。(杉本武 (1986))

これは、「洞穴」があり、さらにその「洞穴」に「脇道」があり、そこを「歩い」ている(杉本武(1986))という文で、一文中に経由点を表すヲ格が二つ存在する。経由点を表すヲ格は移動動詞にとって必須補語であり、二つの必須補語がヲ格で表されているので非文法的となる。このように、移動格-移動格の組み合わせの二重ヲ格も3.1~3.4で見た二重ヲ格と同じ基準によって非文法性が説明できる。

- 4 (31) ~ (34) では、状況補語が全て「~の中を」という形で現れているが、このほか「~ところを」も状況補語の一種であることが杉本武(1986)によって指摘されている。

- (45) 泥棒は逃げていくところを捕まった。(杉本武 (1986))

また、状況格が共起しうるのは「何らかの移動を伴う動作を表す動詞」であると杉本武(1986)

は指摘している。したがって、移動を伴わない動作を表す動詞とは共起しない。

(46) ‘ろうそくの中の明りの中を本を読んだ。(杉本武 (1986))

- 5 柴谷方良 (1978) は、次の例の「雨のなかを」は「目的語としてではなく、副詞的な働きをしている」と述べ、その理由として「「雨のなかをのほりきった」が「目的語-動詞」の関係を表わしていないこと」を挙げている。

(47) 少年は雨のなかを坂をのほりきり、院長の前で立ちどまり、びよこんと頭を下げた。
(立原『冬の旅 (上)』)

- 6 この場合の時間格は必須補語である。つまり、時間を表す動詞とともに用いられた時間格は必須補語となる。時間格が副次補語となるのは、時間を表す動詞以外の動詞とともに用いられた場合に限られる。
- 7 影山太郎 (1993) は、これらの二重ヲ格について「音声的なレベルでは適切さに欠けるが、統語的なレベルでは文法的と見なしてよい」と述べ、その根拠として、①「同じ形式の構文が韓国語では許され」、また「日本語においてもこの種の二重ヲ格は日常の口語ではそう珍しくもなく観察される」こと、②「いずれかのヲ格を用いない方策を講じれば、適格な文が得られる」こと、を挙げている。②の具体的な方策には、「受身や話題化などで目的語の「を」を取り除くこと」、動名詞に「さえ」や「すら」を付けること、動名詞を「する」に転入してしまうこと」などがある。

参考文献

- 奥田靖雄 (1983 a) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論 (資料編)』言語学研究会編、むぎ書房
- 奥田靖雄 (1983 b) 「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論 (資料編)』言語学研究会編、むぎ書房
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形-自・他動詞の対応-」『国語学』70
- 影山太郎 (1993) 『文法と語構成』ひつじ書房
- 龜井 孝 (1955) 『概説文語文法』吉川弘文館
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 城田 俊 (1993) 「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 新屋映子 (1995) 「格助詞の重複について」『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』窪田富男教授退官記念論文集編集世話人編、専門教育出版
- 杉本 武 (1986) 「格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第1巻』くろしお出版
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987 a) 『命題の文法-日本語文法序説-』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987 b) 「格の重複」『ケーススタディ日本文法』寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人編、桜楓社
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

(なかむら きょうこ 岡山大学大学院文化科学研究科)